

4 培地

培地*はココナツハスク*、ピートモス*、混合培地、土（畑土、黒土、マサ土、焼土等）を基本とし、これに排水材料（赤玉土*、鹿沼土*、パーライト*、バーミキュライト*、軽石、火山礫等）、調整培地（石灰、ゼオライト*、薫炭、堆肥、バーク堆肥*等）を、適宜、加えます。排水の良否がコンテナ苗の生育を大きく左右しますので特に注意が必要です。なお、本県におけるコンテナ苗生産者では、上記の培地組成に近いものが使われています（図-4-1）。

既製品として、ココピートオールド*（商品名：トップココピートオールド、トップ社製）がありますが、これを使用する場合、同培地と水を3：1の割合で混合します（島根県中山間地域研究センター 2018）。

ココピートオールドは、輸入品であり、近年、イチゴ栽培も含め、農業分野でも需要が高く、数年後には入手が難しくなることも指摘されています（島根県中山間地域研究センター 2018）。このため、地域資源として、スギ、ヒノキの樹皮等を含めた、コンテナ培地への活用方法も、今後、検討していく必要があると考えています。なお、宮崎県内では、既に商品として製造販売されています（図-4-2）。また、一般のホームセンターの市販培土を利用している生産者もいます。

培地と水との攪拌には、既存の攪拌機等（図-4-3）を使用し、作業効率を上げるとともに、培地をキャビティに充填した後、空のコンテナ容器等を使用し、培地の締固めを行います（図-4-4）。その際、コンテナ苗専用の培地圧注機（図-4-5）を使用すれば、より効率的になります（図-4-6）。特に、播種、または移植をすぐに行う場合、培地は湿った状態で強くキャビティ内に押し込みます（培地が乾くと、キャビティ内側に隙間ができ、将来、縦方向の根の発達がスムーズになります）。なお、散水時にキャビティの上面に水分が貯まるよう、培地を詰める高さは、最大でも、同上面から1～2cm下がった位置までに止めておきましょう。



図-4-1 岡山県内で広く使用されて
コンテナ培地



図-4-2 宮崎県内業者が製造販売
しているコンテナ培地



図-4-3 攪拌機一式

注. 手前：攪拌機作動中
右側：灌水タンク



図-4-4 培地の転圧処理

(締固め)



図-4-5 コンテナ苗用培地圧注機 (左：1枚タイプ、右：4枚タイプ)



図-4-6 コンテナ苗用培地圧注機により
充填された後の状況